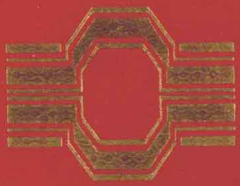

日本文学全集46　平林たい子集

昭和四十三年十二月七日　印刷
昭和四十三年十二月十二日　発行

著者　平林たい子
発行者　陶山巌
印刷者　高橋武夫
発行所　株式会社　集英社
〒101　東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
電話　東京(265)六二一一　振替　東京　一五六五三

印刷　大日本印刷株式会社
製本　大日本印刷株式会社
製函　文京紙器株式会社
本文用紙　東北パルプ株式会社
クロス　東洋クロス株式会社

検印廃止
落丁、乱丁本はお取りかえします

Printed in Japan

日本文学全集

平林たい子集

編集委員（五十音順）
伊藤　整
井上　靖
中野好夫
丹羽文雄
平野　謙

装　幀
伊藤憲治

挿　絵
桂　ユキ子

目次

嘲る　七
施療室にて　二九
殴る　四四
その人と妻　六〇
一人行く　七七
こういう女　九七
鬼子母神　一三五
黒札　一四三
砂漠の花　一六七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

注解　三九九
作家と作品　佐伯彰一　四〇八
年表　四四一

平林たい子集

嘲る

右の手で、よれよれな袷の上から、左の乳房を押えながら、私は前屈みになって、よろめくように歩いていた。

左の乳房の底に、錐で揉まれるような痛みを感じるので、胸をひらいて、調べてみたい衝動を押えながら、歩いてきたのであった。

埃のために、茶色にくすんだ街は、古道具屋の店のように、私の前に幅広くつづいていた。

埃をよけるために、軒下低くカーキ色の日除けをおろした菓子屋の横へ入って、とうとう私は堪えられなくなって胸をひらいてみた。

空気を失った風船球のように、萎びて垂れ下った乳房には、幾筋かの姙娠線が、苦悶の表情のような醜い痕をのこして走っていた。

私は平生、この乳房を見るのが厭だった。自分自身の醜い姿が、そのまま、模様になって、たるんだ皮膚の上に描かれているような気がしてしかたがないのである。

乳房には、何の異状もなかった。私は、また、自嘲の気持が、渦巻のように擡上ってくるのを感じながら、胸に着物を合せて歩きだした。

私は、微かに、黄色な歯を露わして笑っていたかもしれなかった。

人々は、無気味そうに、変な女の顔を見すごして、通りすがって行った。

「あの山の頂から転落し始めた石を、誰が止めうるか——」

矢田の下宿を出てから、何かのはずみに、ひょっと思いついたその、警句のような言葉を、私は、時々唇まで出して言ってみた。

毛糸のまりから、糸が走りだすように、昨夜からの出来事の追憶が、いくらでもいくらでも頭の中に展開されて行くのを遮断するために、私は、行き会う人の顔へ、蠅のようにベタリと視線をつけて、何度も何度もその言葉を繰返しながら、のそのそと歩いて行ったのであった。

うすい埃をのせた、茶色の電車が走ってきた。

運転手は、目の前の軌道にハンマーを動かしている線

路工夫に、けたたましい警鈴を鳴らして、電車が近づいたことを信号した。
しかし、工夫は、まるで命のないバネ仕掛のように、同じ速度にハンマーを振り上げたり、下したりしながら、汗の浮んだ、晩春の昼らしい、懶そうな表情を、動かしもしないで電車道を掘っていた。
「ほら、危いじゃないか」
運転手は、尖った声でどなりながら、あわててブレーキを巻いた。
しかし、惰性がついている電車は、なかなか止まらなかった。
「危いったら」
と、髯のある、年とった運転手は必死になってブレーキを巻いた。
電車は、工夫に接するほどの所でやっと止まった。
ふと、気がついてみると、私は歩道の真中に立止って、それを見ていたのであった。
「止めても、止まらないブレーキ！」
私には、必死な、その運転手の様子が、おかしくって、たまらなかった。止めても、止まらないブレーキは、ちょうど、山から転落し始めた石と同じに、私の身の上をたとえるにふさわしい警句である。
「自分のブレーキは、あの、年とった運転手くらいの努力では、止まりそうもないのだ」
私は、げらげら笑いだしたくて、たまらなかった。
矢田の下宿を出てから、ただ、見当だけで見知らない街をぐるぐると歩き廻って、私はやっと道玄坂へ出た。
絶えず往復している自動車のために、両側にかき分けられている通行人は、汗ばんで、いとわしそうに、袷の裾を蹴りながら歩いていた。しかし、脂の浮いた誰の顔もが、皆美しく上気していた忙しい坂の通りは、美しい縞模様のように、ぼんやりした私の目にうつった。私ばかりが、その縞の色の配合を破る、灰色の糸のような気がした。きゅうに、着物の襟についている白粉が気になった。
私は、睡眠不足のために、すっかり疲れきって下を向きながら、坂を昇って行った。懐ころに、矢田に貰った一円を持っていながら、そこから玉川電車へのるのが惜しい気がするのであった。しかし、坂の上まで来るとついに、我慢しきれなくなって、停留所に立止った。電車の中は、若い男たちの汗の香でむっとしていた。私は、吊革によりながら、ぼんやりと髪の毛のうすい矢田の顔を、曇った窓硝子の所に描いてみたりした。しかし、もう不思議に、その顔を思いだしても、今までのような戦

慄を覚えなかった。
紙に描いた、自分と拘わりない人の肖像画みたいな感だった。
「これが醜い女の心持か」
私は、平然と、自分自身に、きいてみた。
電車が動きだすと、私は、よろよろと、傍の吊革の、若い男にもたれかかった。
その時の電車の不意の衝動はひどかったので、皆、足をすくわれたようによろめいて、その若い男も、傍の商人風の男の方へ体を傾けたのであったが、それにしても私のよろけ方には、誇張があった。瀟洒な合服を着て、左の腕にステッキを引っかけたその男は、ちらと視線で私の方を注意したが、すぐに正面へ向いて、頭の上の広告を見ていた。
苦笑しているのではないか——。
私はその男の横顔を仰いだ。
私は、よく、若い男と行き過ぎたあとで、その男が、近づいてみた私の容貌に失望して、苦笑しているのを見たことがある。
この男も、もちろん、容貌によって女を区別し、ゴルフや、帝国ホテルの宴会を好きそうな、青年紳士であった。
次の停留所で電車が止る時にも、私は、その男にもたれかかった。電車が発車する時にも、私はその男の、地質のいい洋服地の腕に顔をうずめかけた。男は、ようやく、このみすぼらしい女が故意に自分によりそうのであることに気づき、眉をひそめて、じろりと見ておいて、吊革を一つ送って向うへ移った。と、私もまた、何気ない顔をして、吊革を一つ送ったのであった。
男は驚いて、この女の動作に気づいた味方を求めるように、あたりを見廻した。
その時、男の前の座席が空いた。
男は、青年紳士たる、平生の習わしを忘れたように、肱で私を妨げながら、あわてて腰を下した。
次に電車の衝動が来た時には、私は、よろけて、その男の膝の上へ、肥った手を、どしりとついたのであった。
男は、青い顔に誇張した憎悪の表情を浮べて、私を睨めると、つと立って入口の方へ分けて行った。私はすまして、その座席に腰を下した。何か、快よいものが、胸を下るようであった。
車掌が切符を切りに来ると、私は懐から、矢田に貰った、汚れた一円紙幣を出して渡した。
——この金はどうして得た金だか——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

私は、何だか妙な気持になって、彼の顔を覗いた。
「一円？　さあ、剰銭があるかな」
車掌は、紙幣を手に持って、鞄をあけた。
「どちらまで」
「××までです」
「どこからお乗りになりました」
「大橋からです」
私はなだらかにいった。
「大橋？」
と、彼はちらりと、私の顔を見ておいて、剰銭の白銅を掌の上へ、一枚ずつよこした。
私は、どぎまぎして、顔に血が上ってくるのを覚えた。彼は、私がうろたえたのを見ると、明かに区間をごまかしたものと思ったらしく、今一度じろり私の顔を見ておいて過ぎた。しかし、私がうろたえたのは、区間をごまかしたためではなかった。若い男特有の光のある目で、ちらりと見られた時に、私は、心の底の方にあるものをまで、皆見られてしまったような気がしてたじろいだのであった。
その車掌は、胸に銀色のメダルをさげて、髪は、帽子の外まで垂れて見えるほど長くしていた。高い鼻の傍に、くっきりした陰影があって、美しかった。

彼が去ってしまうと、私は何となく安心して腕を組んだ。
「しかし、あれだって、堂々たる日本銀行発行の紙幣なんですからね」
降りる時に、そういう言葉のつもりで、ちょっと車掌に微笑を投げかけた。それから、私は電車道をちょっと入った所の暗い魚屋へ入った。魚屋は、私の傍に立ってじっと私の言葉を待っていたが、私は、いつまでも、鱗が変にぎらぎら光る、並べた魚を見て、立っていた。赤い生鮭の切り身に、金色の蠅が二匹へばりついたようにとまっていたので、何だか胸がむかむかしてきたのであった。魚屋は妙な顔をして私の顔を見ると、奥へ入って行こうとした。
「あの、これをください」
私はあわてて言った。
魚屋は鱗のついた手で、あわてて傍の、真直に立上っている線香の煙を動かして蠅を追った。
道々、私は、電車の中の、自分の妙な動作を思いだして笑った。

うす緑に汚れた顔をして、竹藪の蔭になっている床屋の二階へ帰ったのは、もう夕暮近い時刻だった。私の心

の中は、ふたたび縮むことができないように、伸びきってぽかんと広かった。
「こうやり、ああやりして生きて行くうちには、何とかなるのだろう」
やっぱり、私は、私自身を、そう言って慰めるほかしかたがないのであった。
暗い土間へ、音のしないように、すうと入って、下駄を脱いでいる時に、小山が便所へ降りてきた。
「どこをほつき歩いていたんだ？」
と、小山は、私の姿を見ると、階下に婆さんが仕事をしているのに気づかずに言った。驚くほど、大きな声だった。
私は答えなかったが、その時、婆さんは、縫物から爛れた目をあげて、外へ泊ってきた私をじろりと見た。
「無能なあなたとの生活を守るために、私は街へ出て、こんなことまでして、どうかしようとしているのです。これほど、私は、この生活を守りたがっているのですよ」
そういう言葉を作ってみながら、私は階段を昇って行った。
自分の、こういう行為に対して、誰かがひょっとそういう言葉で同情して、批評してくれるのではないかと、朝から時々そんなことを空想して、その、真黒い悲壮美ともいいたいものを享楽してみたりしていたのであった。
足が錘を結びつけられているように重く、疲れていた。
夫との生活を守るために、貞操を売るということは、どの時代にも了解され、ある時には、讃美をさえ惜しまれない貞女として、批評されてきたものであるが、私の場合では、それは許されなかった。
私は、それほどにまでしてつくさなければならない必要を、彼に対して持っていなかった。私は過去に、三人の男を知り、三人の男を、何の悶えもなしに捨ててきた女であった。
小山は、二度の監獄生活に懲りて社会運動から逃避し無名な原稿を書き、四年もつづけている男であった。彼の原稿は、不思議に、どんなに大作を、どんなに根気よく書いて持ちこんでも、糸をつけておいたように、次から次から戻ってきてしまうのである。
私といっしょになる動機にも、女を働かせる、という狡猾な考えを第一の理由としてひそませなければならない、みじめな男であった。
「ね、お前、今度だけでいいから誰かに頼んで、少しつ

くってきてくれないか」
生活が窮してくると、彼は、そのきれの長い目を細くして、まじまじと私の表情をうかがいながら、今度こそ、今度だけだ、という風に、私に哀願するのであった。
しかし、その「今度こそ」は、今までにもさんざん続いてきているのであった。
「そんなこと、できませんよ」
と、私はあっさり答えて、そんな時に、蔑むように、彼の顔をじろじろ見てやるのであった。
彼の言う、誰かとは、私の過去にかかわりある男たちの誰かをさす言葉であったのだ。
昨日も、私たちは、そういう会話を交わしたあげく、私が煩わしくなって、おとなしく立上ったのであった。この前、矢田の下宿へ行って金のことを頼んだ時に「人の女房になぞ、金をつくってやることはできない」と断られて、私は、そのとおりに小山に伝えておいたはずだった。
私は、汚れた足袋をぬがないままで、黄色な畳の上に、ベタリと坐った。
あざやかな夕日の、細長い光が竹林の湿った土の上を這うように揺れていた。
小山の昇ってくる足音をきくために、耳をすましているのであったが、彼は外へ出てしまったらしく上ってこなかった。窓の下を見下しているとしきりに咽喉の乾くのを覚え、さまざまな考が、頭の中を交錯した。
正しいものは貧しい——、私はこう信じたいのであった。私は知人の労働者の妻に夫に無理解な女を知っていた。彼女は、夫が罷業のために工場を休むと、口汚く罵った。
「うかうかと、人の煽動になぞのって、お先棒になる者は損だ」と妻は夫を笑った。夫である労働者は、妻の言葉などで動く男ではなかったが、しかし、時々、私は、その男がたまらない、憂鬱な顔をするのを見た。
見えない女の力は、今までにもあまたのストライキを職工側の敗けにさせ、資本家に勝利の誇りをあえてせしめているに違いなかったが、それは、女自身では、どうにもできない、意識しない因襲の力であるに違いなかったが、そういう女を見ると、どうしても、私は冷かな侮蔑の気持を押えることができなかった。
私の場合でも、小山に対して、それがあるのではないかと考えてみたこともあったが、私たちのはまさしく、その反対の関係にあるのであった。
「ルンペン！」

私は、今一度あらためて、彼を辱しめてやらなくってはいられない気がした。いかに、私が、恥じなくってはならない、多くの過去を持っているにしても、それがすなわち、彼の強味になるべき理由はなかった。

しかも、彼が生活のあらゆる責任を私に打ちかけてくる心の底には、「そうもして俺の機嫌をとらなければならない弱味を、お前は持っているのだぞ」という意識が、ちらちらと覗かれるのであった。

そして、私自身は、理想によって男性を求めることに疲れ、生活に対する新鮮な弾力を失って、自分の意志以外の、髪の毛の一本ほどの力にも引摺られて行かなければならないみじめな女なのであった。

私は、第一の、初恋の男によって子を産んだ。子供は、二人で流浪した満洲の施療病院の、日かげの室の赤く錆びた寝台の上で産れて、私が、産後の脚気のため脚の立たない苦しみに身もだえしている時に、消えるように、うすい布団の上で死んで行った。子供の父は、ちょうど私が陣痛の苦しさを感じ始めた朝、思わないことから旅の空の監獄へひかれて行ったのであった。そうして、私の放浪が始まった。

私の肉体の上には、一度子供を産んだ者でなくっては見られない醜いたるみができていた。私の二つの乳房は、猫の死体のように柔かった。

行李の底には、木綿の、金襴まがいの布に包んだ小さい骨箱がひそめてあった。入獄した愛人を捨てて、目に見えないものを追いながら、次から次へと男をかえて行った私にも、その玩具のような、振ってみればかさかさと微かに鳴る小箱を、手離すことはできなかった。

行李の底の、小さい骨箱を中心にしても、幾度か、私たちの間の感情はもつれあった。

理論や感情の上では、疾くに、それを解決していながら、そういうことに対して、時々何とか言って、自分の立場に一味の強さを示さなければならないのが、この男の性格であった……。

果しない追想は、ついには、私の瞳をうるませた。

こういう結果に導いたものは、何の力であったか。

現在の自分には、それを究める力さえなかった。ただ、倦怠と、空費の海の中に、漂い、流れて行かなければならない自分なのであった——。

左の乳房の底に、また錐をもみこむような疼痛が襲ってきていた。朝から、目にふれるものがみんな、熱になやんでうれきっているようにぼんやりしている中で、この痛みばかりが、私の神経を、針のようについているのであった。

黄色な膚のつやつやしい竹は、薄い夕日を受けながら、少しの風にも奥深く揺れていた。
私は、しきりに水をもとめながら、立ち上って、下へ汲みに行く気力を失っていた。
「矢田の所へ泊ってきたの？」
と、小山は、入ってくるなり冷く言った。
「ええ、昨夜のうちに帰ろうと思ったんですけれど、電車賃を借りようと思ったら、今はないけれど、明日の朝だったら友人が来るからって言ったものですから」
「俺に煙草銭もないっていうことを、お前は知っていたろう」
「ええ、知っていたからこそ少しでも借りようと思って……」
私は、右手で胸を押えて、乳の痛みに堪えられないように言葉を切った。
「どうしたんだ？」
「乳が痛いんです」
「きゅうに、痛くなったのか？」
「いいえ、今朝から……」
いってしまって、私は、はっとした。
「昨夜、矢田の所へ泊ったからだろう」
彼は、毒々しくそう言って、横へ向いた。
「何ですって？」
と私は、落着いて彼の方へ向きなおった。
「私は、あなたの命令で、矢田さんの所へ行ったんですよ」
「それで、金は、かりられたのか？」
彼は、私の態度によって、あらゆることを洞察しようとするように、私の顔をじっと見つめたがすでに「何事もなかったな」という決定の色が、ありありと彼の顔に見えた。
「だめ」
「少しも？」
金のことは、彼にとっては命にもかけがえのないことのようであった。
「電車賃だけですのよ」
私は、懐の五十銭銀貨を、思いだして言った。「一円」という金額が、自分に恥しくって、何だか言えなかった。
家を出る時から、もちろん私は、いよいよ矢田に最後のものを許すつもりで出て行った。
それほどにまでしても、この男のためにつくさなければならない、と私は私自身に命令し、自分を、雄々しい戦使にもなぞらえた。

こういうことを、こういう気持で行うことは、またこれほどにも意気地のない彼に対する、淡い復讐心と征服慾とを満足させることであった。事実の上でも、私たちの窮迫はこんな方法をつくしてでも金をつくるよりほかに、道がなかったのであった。

しかし、予期したとおりの結果になってしまうと、私の気持は変ってしまった。

あんな男のために、こんなことまでして金をつくる自分が、何となく滑稽でたまらなくなった。冒瀆だと思った。

今まで見えなかった世界が、きゅうにひろびろと私に見えた。まだまだ自分は、人生に、理想を持ちうると思った。

それで、私はきゅうに昔の自分のようにしおらしくなって、金のことは言わずに帰ろうとしたのであった。今一度、これをこういうことの最後として、一人の、新しい生活を始めてみよう——。夜中眠らなかった私は、どこかけだもののような感じのする、矢田の寝息をききながら、小山に投げつける、最大級の言葉をしきりに考えたのであった。

しかし、また矢田の下宿を出る時には、私の幻は、皆打ち壊された。矢田は、私が帰るというと前の約束を思いだしたらしく、紙入から一円紙幣を惜しそうに出して機械的に私に渡した。気のせいであったか、その時「では……」というような言葉が、矢田の唇から洩れたようであった。私は、自分の体じゅうに蟬の声のような、喧しい自嘲の言葉をききながら、ふらりと戻ってきたのである。

小山は、火箸で紙屑だらけな火鉢の中をかき廻し、やにの汚点の出た、バットの短い吸殻を拾いあげた。

「買ってきなさいな」

と、私は、ふところから五十銭銀貨を出しながら、欠伸をした。

「これだけ、貰ってきたのか？」

と小山は珍しいもののように、銀貨を掌の上で見ていたが、やがて煙草を買うためにみしみしと下りて行った。

むし暑い窓をひらくと、窓の形の、長方形のあかりが、竹林の暗い地面に落ちた。地面には、茶色の皮を被った筍がすくすくと生えていた。若い男の、力強い腕を聯想させる、新鮮な、その太い芽は一日見ない間にも見違えるほど伸びていた。

どこかから、ブーンと蚊のなく声がきこえた。むし暑い気候のために生活力を増した蚊が内の臭をしたって、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb